

淀井慧(さとし)さん七十四歳

何事も楽しんで取り組むこと！

平成二十六年五月二十六日 江田寛



淀井慧さんは大阪府門真市千石西町に住む。出身は京都府。

門真市には、二十七歳から町工場で働き、結婚したことを機に住むようになった。姑が府営住宅に応募し、義妹と淀井さん夫婦の住まいを当ててきてくれたので、それ以降、今に至るまでの四十七年間、ずっと門真市に住んでいる。

住んでみて、門真市は住みやすい

門真市では、地域の有力者に「淀井」という一族がいるおかげで、元来門真にゆかりがない中で、地域の集まりなどに顔を出すと、勘違いされて丁寧な扱いを受けることが多々あった。

「俺は嘘言わんけど、相手が勝手に勘違いすることに関しては別に説明しようとは思わなかった。せやけど内緒やぞ、俺は腹黒いからな！」。

仕事について

中学校を卒業してから働き出したが、最も長く働いた場所は、下請けとして松下電工の製品(蛍光灯などライトに関連する製品)を作る、門真市にある電気製品の町工場。そこで二十七歳から定年を迎えるまで働き、七十四歳になる現在も、営業部長として週に3日勤務している。

長い間営業職をしていたが、会社に入ってから二年半は工場の製品や部品を倉庫に運ぶ運転手をしていた。

運転手時代

当時、倉庫が午後三時に閉まるので、運転手の仕事はその時間までだった。なので午後三時に仕事をあがり、会社の倉庫で昼寝していると、社長からお怒りの電話がかかる。でも、自身の任された仕事を片付けているにも関わらず、命令もないのに他に仕事をしろと言われる筋合いはない、と若手にも関わらず、社長に食ってかかるような社員であった。社内の運搬業務の効率化を図り、一人で業務改革を行うほどの実力はあった。そんな力が認められ、社内での反対の声もある中で、製品の生産管理を任せられることとなる。

生産管理・営業時代

会社の課題として、一か月に一〇〇〇分間も工場のラインが止まっている状況があった。高度経済成長期の真只中であり、製品の材料の供給が必要に追いついておらず、材料が不足することが多かった。各種材料の提供元に走り回って、納品期日を守ってもらうために頼み込んだり、その時は無我夢中で取り組んだ。どういった工夫から解決に導いたのかはつ

きりと覚えていないが、一年もかからないうちに一〇〇〇分のロスを0分に改善した。

営業職についてから、まず苦労したことは、中学校を卒業してからすぐに働きだしていることもあり、文字の読み書きが人よりもはるかに苦手であった。そのため、例えば領収書を作成するときに、読めない・書けない文字があり、すごく恥ずかしい思いをした。

製品を売るに当たって、大きな利幅を得られるように常に考えて仕事をしていたというよりもそれくらいの気持ちを持って取り組まなければ、少しでも多く稼がなければならぬ立場の営業職は務まらなかつた。クレーム対応等も多かつたが、心がけたのは「説得をするのではなく、納得をもらう」ことであつた。

取り扱った製品のうち、ホテルの客室でよく使用されているライトパネルは、かつては松下電工が初めに売り出したもので、全国のホテルから発注を請けていたため、月の半分ほどは家庭にはおらず、全国各地へ出張して、製品の説明やメンテナンスを行っていた。

そのおかげで、娘からは、「父親つてもんは、どの家庭でもほとんど家にいないものかと思っていた」などと言われることもあつたが、全国各地に様々な仲間や友達ができた。もらった名刺の数は、名刺が一〇〇枚入る箱が十九箱分あり、大切に残している。今となつては自分にとつて、この人とのつながりが、自分自身を表すものであり、最も大事なものとなっている。

現役引退後

現在の会社での役割は、雑務から社長（四代目）のサポートまで、あらゆることを行っている。

家庭について

年がら年中あまり家に居なかつたが、娘からは「家族サービスは少なかつたかもしれないが、これまで背中を見てきて、尊敬できる父親」と言ってもらえた。

奥さんは、車でひき逃げに遭い、十九年前に亡くなつている。それまで自炊もしたこともなかつたので、そこから七年間、今の奥さんと出会うまでは色々苦労もあつた。

娘婿との関係は、娘婿は大学卒、私は中学卒という学歴の差もあつてか、上から目線の態度を取られることがしばしばあつた。娘婿の勤め先は松下電器産業で、その中でも優秀な部門に居たとのこと。そんな折に、奥さんが亡くなられた際、七〇〇人を超える人が参列に來られ、しかもその中には、松下電器産業の重役も顔を連ねて参列しに來てくれていた。淀井さんが現役時代から創り上げてきた、人とのつながりを大事にした結果である。娘婿はこの時の様子を目の当たりにして、「義父さんって何者やねん」と娘さんに漏らしており、それ以降は態度も変わりました。孫は居ないので、自分は人から「おじいちゃん」と呼ばれると、「おじいちゃんちゃうわ！孫おらんわ！」と返す。

中国へ一人旅

淀井さんは予てから、下記の3つの動機から、中国を訪れたいという想いを抱いていた。

動機一

四十九歳のときに部長職に着き、七人の中国人が部下についたことがあった。中国人について、日本との文化の違いからか、その当時は中々理解できないことが多かった。

例えば玄関の掃除を頼んでみると、玄関の内側までは掃除をするものの、軒先については全く掃除しないことがあり、軒先を掃除するように頼むと、それは仕事の範囲ではない、と返されたり。

このことにより、まずは中国人のこのような考え方は一体何からきているのかという興味がわいた。

動機二

淀井さんは戦争を知る世代の人で、中国人の、残留孤児に対する人道的な対応について、感謝する気持ちを抱いており、一度中国に対してお礼を言いたかった。

動機三

淀井さんは釣りを趣味としており、中国に行った際には幻の魚である「イトウ」を釣りあげたいという強い気持ちがあった。

これらの想いを胸に、いざ日本を出発し、中国に降り立ってみる。中国に足を着けた感想は、

「臭い！」

その時は何の臭いかはわからなかったが、中国では、日本のお鍋に入れるようなネギを生でかぶりつく習慣があったそう、そのネギが腐った臭いだったのではなかったか。町に出て、売られているものを見ると、野菜が売られていたが、日本では捨てられてしまうほど傷みきつたものばかりで、旅の始まりから色々衝撃的であった。その時現地で感じた価値

観は、どんな売り物も「使えれば良品」

といった感覚で物が売られていたこと。

目的地の一つであったハルピン市で、一つの出会いがあった。日本の雑誌を読みながら、列車で旅を続けていると、一人の男性が近づいてきて、「日本人ですか？」と尋ねられる。流暢な日本語を話す人だと思いつつ、そうですと答え、今度はその男性に対して話を聞くと、ハルピン大学で教授をしているが、日本の関西大学で客員教授をしていたとのこと。その教授からの、旅の目的であったり、宿（ノープランで中国へ来ている）のこととであったりと質問に答えていると、教授はちやうど、知り合いの結婚式へ向かう最中だったようで、淀井さんに一緒に来るように誘ってくれた。気の向くままにその結婚式に参加させてもらい、日本から中国に対してこのような想い（動機二参照）を持った客人が来ている、と紹介されて、挨拶までさせてもらった。

祝いの席なので、お酒をたくさん出されたが、私はお酒が弱い。しかし、中国の乾杯のしきたりは、すべて飲み干すこと。その日以降、丸二日ダウンしてしまった。しかし、そこでも多くの友達が出てきて、結果的に二〇〇人程友達ができた。

幻の魚であるイトウについては、釣れるポイントを探したり、ポイントまで行くための費用を教えるもらうと、かなり費用が掛かってしまうことが発覚したので、残念だがあきらめた。

この時に得たつながりは、その時だけのものではない。その後中国に行くときは、ホテルに泊まることはなく、毎回友達の家ホームステイするほど、交流を深めている。

友達の中には警察で働く人もおり、一

緒に撮った写真を日本に持ち帰り、部下の中国人に見せると、すごく驚いた。警察の制服についているマークの種類によって階級がことなるようで、部下曰く、かなりのお偉いさんであったとのこと。ちなみにその写真を見せて以来、部下たちは手のひらを返したように淀井の言うことを聞くようになった。

この先やってみようこと

- ・ エスキモーの獲った野生のアザラシの肉をどうしても食べてみたい。
- ・ 市の老人クラブ連合会をもっと風通し良いものになりたい。自校区の老人クラブは時間がかかったが、風通しが良かった。

大事にしていること

仕事にしても、自治会活動にしても、楽しんで取り組むこと！楽しめなければやめればいい！

どんな事象にもいくつかの結論があり、そこにたどり着くにはどのような考え、どのように動けばたどり着けるのかを考えるのが楽しい。

進んだ道が間違いであれば戻ればよいし、何事も後ろ向きに考えていては後がしんどい。転んだ場合でも前向きであれば進みだすのは一歩で済むが、後ろ向きであれば余計な歩数が必要になる。

何のCMでか忘れたが、そのようなことを言っていた。共感したので、会社の若手社員にもこのことを伝えている。

淀井慧さんの話を聞いた。
何事にも、できない理由を外に求めず、

自分の考えで結論を探り当てている。うまくいかないことも少なくないが、それすら楽しみながら活動している。

淀井さんの話を聞いたり、一緒に居たりすると元気が出る。淀井さんの周りにはたくさんの方が居るのはそういうわけかもしれない。

それと楽しむ気持ちだった。楽しんで取り組むこと！楽しめなければやめればいい！

いいね 淀井さん。

私も楽しむ気持ちで、行動していきます。

